

沖縄の藍染料に関する史料紹介（2）

— 『山藍新書』 —

大湾 ゆかり 崎原 恭子

Introduction of historical materials on indigo dyes in Okinawa (2)

— “Yamaai shinsho” —

Yukari OWAN, Kyoko SAKIHARA

沖縄県立博物館・美術館，博物館紀要 第16号別刷

2023 年 3 月15日

Reprinted from the

Bulletin of the Museum, Okinawa Prefectural Museum and Art Museum, No.16

March, 2023

沖縄の藍染料に関する史料紹介 (2)

— 『山藍新書』 —

大湾 ゆかり¹⁾ 崎原 恭子¹⁾

Introduction of historical materials on indigo dyes in Okinawa (2)

— “Yamaai shinsho” —

Yukari OWAN¹⁾ Kyoko SAKIHARA¹⁾

はじめに

沖縄の伝統的な染織物に用いられる「琉球藍」²⁾は、琉球王国時代にはすでに生産が始まり、明治期になると廃藩置県で職を失った人々の換金作物として盛んに製造された沖縄の代表的な藍染料である。化学染料や衣文化の変化によって需要が激減するも、戦後も宮古上布や琉球絣などの染織物にとってなくてはならない染料として用いられ、今も生産が続けられている。

筆者は、琉球藍の歴史や製藍技術の変遷などを辿る目的で、これまで多くの藍関係資料を集めてきた。前号では、琉球王国時代の琉球藍に関する資料について紹介したが、本稿では、明治21年に印行された石井清吉が著した『山藍新書 全』(写真1)を取り上げることにする。同書は、今回底本とした「東京京橋区采女町文英社印行」と記された版と、国立国会図書館のデジタルコレクションで入手できる明治23年に大木敬太郎が発行人となって出版した版があり、後者には緒言が追加され、著者名に岸精一が付加されている。前者の書は、当館が令和元年に購入した史料で、令和2年度博物館企画展「沖縄の藍—自然と人が織りなす製藍の技—」において展示した。明治時代に入り印度藍の流入によって日本の製藍業に陰りが見え始めた前半期に琉球藍に着目し、タデアイより藍成分の含有量が多いとのことでリュ

ウキュウアイを本土にも移植し、その製藍方法を紹介しようと試みたのが本書である。

本稿ではまず『山藍新書 全』全文の書き起こしを掲載し、次に本文内容の概略を示すことにした。同書の体裁は元々縦書きで漢字とカタカナが併用された文体になっているが、本稿では読みやすくするためカタカナをひらがなに改め、旧字体はできる限り新字体に直し、適宜句点を挿入して表記した。また、本文中に記されている読みがなは【 】内に付し、本文中、小文字で表記されている文字は()内に記した。本文の書き起こしは、崎原恭子と大湾ゆかりが行い、ひらがなへの変換その他の文章の改変と内容の解説は大湾が行った。

本書は沖縄の明治期の製藍業がいかに行われていたかを明らかにするうえでも重要な史料で、現在の琉球藍製造にも通じる部分が多々あるので、参考にしていただければ幸いに思う。



写真1 『山藍新書 全』表紙

¹⁾ 沖縄県立博物館・美術館 〒900-0006 沖縄県那覇市おもろまち3-1-1

Okinawa Prefectural Museum & Art Museum, 3-1-1. Omoromachi, Naha, Okinawa 900-0006, Japan

²⁾ 本稿では、藍染料の名称は基本的に漢字で表わし、含藍植物の和名はカタカナで表記する。

1 書き起こし

山藍新書 全 非売品

琉球藍之説
内地移植之説
栽培法
製造法
出方法

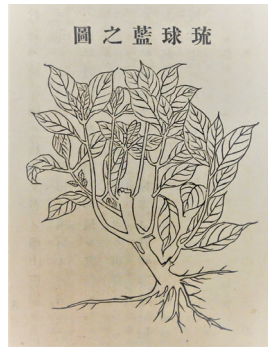


写真2 琉球藍之図

阿波藍名冠天下而為天下用尚矣琉球産藍亦尚而其用特止琉球於戲琉球藍不若阿波藍乎曰否天下人未知琉球藍性質與夫品位功用耳此乃所以山藍新書之著起哉而今而後天下人由此書而驗之實地知彼山藍與畑藍之優劣則捨彼取此必矣語曰青出於藍青於藍吾信琉球藍出于阿波藍後而位于阿波藍上猶積薪之勢

維時明治二十一年四月下浣

書于那覇官舎仇池僊史

新種を発見し新業を啓発し国家之福祉を増進するは衆庶の職分公利を創起し公益を計画するは人士の哀情なり。然り而して凡庸志士の亦為し得へき事に非ざるなり。嚮に石井清吉氏沖縄に遊び該地の農産に注目し普く全島の農事を探究する日久し。茲に於て山藍の利益なることを発見し之を内地に試植し多年の経験と熱心によりて意の如く充分の好結果を得たり。因て広く天下の各地に蕃植し我国の物産とせば国家を利する少々に非ずとして茲に山藍新書なる者を著し世人に知らしめんとす。世人琉球の上布及飛白の貴重なるを知ると雖とも未其貴重の由て起る処を知らず一度氏の書出づるに逢ひ始めて該布は藍に職由すと言ふことを知る可し。

抑も藍染は独り我国の特愛するのみならず欧米諸州に於ても大に貴重せられ随て其費消の額も亦尠なからず。果して氏の言の如く此有益の新植物を内地に移し盛に蕃植精製することを得は独り輸入を防ぐのみならず輸出の途を開くに至らん。余久しく琉球に在り實際聞見するに其耕作の簡易製造の單純染法の容易なると利益の夥多なるとは農産物中他に比類を見ず。依て是を内地に移さは農家を裨補すること多からんと多年思考せしに此書出するに際し当業者果して完成を得は国家を利すること太甚大ならん矣。

于時明治二十一年五月上浣

岸三郎識

琉球藍之図

此図は琉球國に於て立春の頃山藍樹の田圃に在る者を採り其真相を摸写する所此藍樹は前年穀雨の節枝藍を挿植し其秋已に一たび刈り採りたる后發育したる再芽にして尚ほ甚た幼若なり。自今幾多の春雨春晴を経るときは愈々榮育茂生して枝は二尺に余り葉は四五寸に及はんとす。

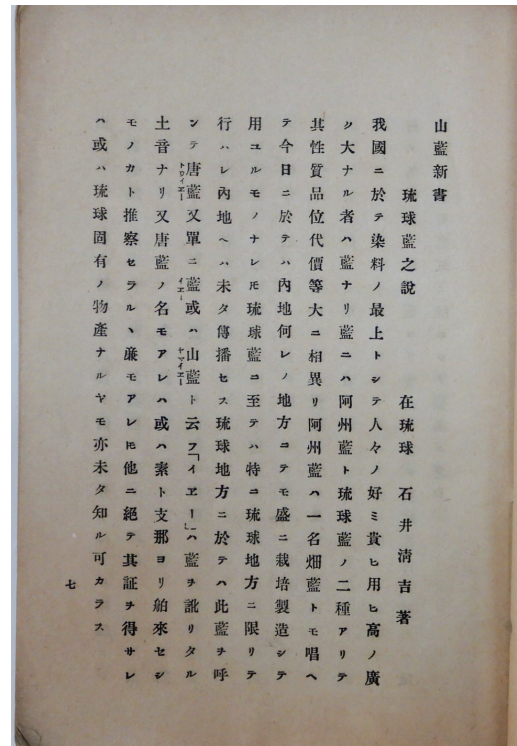


写真3 本文書き出しの頁

山藍新書

琉球藍之説

在琉球 石井清吉著

我国に於て染料の最上として人々の好み貴ひ用ひ高の廣く大なる者は藍なり。藍には阿州藍と琉球藍の二種ありて其性質品位代価等大に相異り阿州藍は一名畑藍とも唱へて今日に於ては内地何れの地方にても盛に栽培製造して用ゆるものなれとも琉球藍に至ては特に琉球地方に限りて行はれ内地へは未だ傳播せず。琉球地方に於ては此藍を呼んで唐藍【トウイエー】又単に藍【イエー】或は山藍【ヤマイエー】と云ふ。「イエー」は藍を訛りたる土音なり。又唐藍の名もあれば或は素と支那より舶来せしものかと推察せらるゝ廉もあれとも他に絶て其証を得されは

或は琉球固有の物産なるやも亦未だ知る可からず。山藍は凡そ藍中第一の良質を備へ其分子極めて精緻にして顕微鏡に照すときは粒々紫藍色を呈し光沢優美にして最も愛す可し。人一たび之を熟視して次て阿州藍の分子を熟覧すれば均しく皆な藍にして山藍と畑藍とは其精粗優劣斯く迄違ふ者かなと驚かざる者非らざる可し。

又化学上より之を視れば山藍と畑藍とは素と藍質を組成する性分に於て互に其量を同ふせず。藍質を組成する重大なる性分は即ち藍青と云ひ藍紅と云ひ及び又藍褐と云ふ。染料に於て最も貴重なる者は即ち藍青次て藍紅にして藍褐に至ては又何の益なきのみならず却て害となる者なり。而して阿州藍は琉球藍より藍褐に富て藍紅藍青に貧しく琉球藍は藍青藍紅に饒にして藍褐に乏し。

従来我々の貴ひ重んずる薩摩上布薩摩飛白は原より琉球に於て織出す所の紺地に於て其上等は一反の代価常に上布は十円以上四五十円に及び飛白は三四円より八九円に至る。之を紡ぎ之を織るは多く機女の手を煩すとは云へ上布は琉球真苧と称する一種の麻苧にして市価一斤（一六）三十銭内外の原料より成る麻布にして飛白も亦内地より輸入する唐綬和綬及び打綿にして市価一斤各々三十銭内外の原料より成る綿布なり。此綿布麻布にして絹布毛布も及はざる程の高直^{ママ}段を占むるものは如何なる訳そと尋ぬるに全く染料の大に優れたるに因る者なり。若し染料の一事を除き紡織の如何と飛白の模様とを以てすれば此上布は逆も越後上布に及ぶ可からず。此飛白も亦久留米飛白に若く可からず。然るに需要者の其れ此に拘らす斯る高価を出して好んで之を購はんと欲する希望は其染藍の優美にして永く色合の変らざるに在るものなり。

抑も琉球藍即ち山藍の真に藍中第一の良質を備ふことは顯然蔽ふ可からざる証徴あり。其之を用ひて水色浅黄花色等の薄物を染めるに唯た藍甕より染め出せし儘にて其色合飛立つ如く麗はしく又別に水にて滌き洗ふを要せず。將た瑠璃紺と称する純良美麗の紺色を染むるは特に之に止まれり。又是より染め成したる薩摩上布薩摩飛白は之を着服として最も久しきに堪へ着ては洗ひ洗ては着幾回と無く斯様に為

し五年十年と着続けに着たる古着と雖とも色沢依然として元の如くなるに由り何時も切立の新衣の如し。阿州藍とすれば水色浅黄花色杯は染上げて後幾度も清水にて滌かされは色沢更に有ること無し。且つ是より染め成したるものは一回洗濯を為すときは如何に上紺と雖とも色沢忽ち悪しく変して全く元の形状を失ふ可し。山藍と畑藍との品位優劣豈に亦大なる者に非ず歟。故に山藍は其代価も常に畑藍の二倍以上に位せり。

阿州藍即ち畑藍は種子を蒔き苗を作りて之を植へ其繁茂を待ちて一番二番と刈り干し乾し葉を揉み採りたる上百貫二百貫と大に之を聚積し水分の作用にて五六十日も床に盆し然る上之を搗き或は乾し或は其儘之を出す者にて其栽培製造出方等実に容易の手續に非ず。且つ製造は製藍家に非れば為すこと能はず出方は染織者に非れば能す可からず。然りと雖とも琉球藍に至ては左様に六ヶ敷ものに非ず栽培法は少しく注意を要すれども製造と出方とに於ては何の造作も無く婦女子の手にて充分に出来るものなり。此藍は元より種子と云ふ者は非ずして之を植付るには根種又は挿木と為し其繁茂を待ち阿州藍の如く一番二番と刈集め生葉の儘直様大桶又は大甕に投げ入れ水と其他のものゝ作用にて僅に二三日にして製し揚く可し。

此製藍は其用法の甚た容易なるか故に何れの家に於ても染物を為すに著しき便利のものにて爰に糸反物等を染めんと欲するときは其多少に随ひ製藍の多少を用ひ糸百目を染めんと思へは其分丈けを出すを得べく又反物一反を染めんとすれば其分丈けを出すを得へし。其之より多きは何程多くも勿論随意勝手なり。

内地移植之説

前説述ふるか如く琉球藍は其性質品位の頗る優等なるのみならず製造も容易すく用法も便利にして全く一種別格のものなり。余の初めて琉球に来るや琉球物産に於て第一に余の注意を惹きし者は即ち此山藍にして其初は如何にも阿州藍とは格別にして栽培も変なり製造も奇なり。用法も亦甚た妙なりければ唯た面白八分に見物を為し彼処に至りては其実地を視此処に來りては其實説を聴き漸く略ほ其利害を承知するに及んで不図一の希望を起し独り熟々思へらく

³⁾ ママと振り仮名のある漢字は、原文のままで表記する意味。

凡そ琉球の農産中近時最も収益の多き者は独り山藍に限る可し。我れ寧ろ忽ち琉球農夫と化して自今山藍を作らんか曰く否未た可ならず。今我俄に球農と変し^{ママ}已れ一人之を作るは唯た己れ一人の利を為す而已若かす自ら一步を進み之を内地に移植する方法を発見し以て内地に押し広めんには然ときは遂に国内一般の利とならんと。

依て先づ農事に熟練にして且つ斯る事に熱心なる内地の一友に此由を報し次て数株の苗を送り之を試植せしめたるに全く思想の反対に出て総て枯れ果てゝ唯た一株^{ママ}タも発芽せされは遺憾。殊に限り無く内地と琉球とは風土気候は異れとも己に此地に生育して又彼地に生育せざるは原来了解し難き事柄にして定めて取扱ひの未だ宜しきを得ざるか為めならんと偏に斯点に向て工夫を凝らし更に今一回試みんと欲し能く注意に注意を加へ期節を計り種類を改め十分強壯の苗を撰み丁寧なる荷造を為し以て再び之を寄せしに此度は以前と違ひ悉く善く生育繁茂して亦琉球地方の生育繁茂に毫も劣る所無く枝枝相交り葉葉陰を垂れ数歩染むるか如く観る者其美景に驚き且つ其奇草たるを賞せざるは無し。於是人々頗に其分配を乞ふに依り友人も止むを得ず彼に一株此に一枝と遠近に分興して残す所は唯た僅に一株に過ぎず。其之を得たる人々は尤に之を珍重して他の観娛に供する花卉の如く植樹鉢に栽へて^{ママ}椽側に据へ又は床上に置き愛玩惜かす。然るに冬期に至り寒傷を避けんか為め各人各種の貯蔵法を設け或は以て日光に照らし或は以て暖室に置き又は炉辺に又は床下に其貯蔵をなしたりと雖ども凡て未だ春に至らずして遂に悉く枯らし尽しぬ。然るに友人の一株は秋寒の頃甘藷と共に一寸区を割り温穴の中に貯蔵し置き春暖の候に至つて之を出せしに枝々皆な新芽を発して恰も植付に宜しければ友人は殊の外に打悦び一株毎に根分を為して畑に下たし千万注意して培養せしかは亦昨年の如く榮育茂生し夫の分与を受けて枯らせし人々は之を見て大に羨まざるはなかりき然るに惜む可し。友人は尚未だ挿木の法を弁せざるに依り少壯の株苗を作るを知らずして老衰の古株を以て之を来春苗に貯蔵して遂に枯死するに至れり。友人は老衰の古株は自然其死に至るを知らされは尤に驚き且つ自ら不注意を責め詳細なる報告を寄せ復た更に新苗を送らんことを言ひ越したり。依て亦復た数十株の良種と

挿木法とを送りたるは今より三年前の事なるか。其苗は皆能く生々榮茂して今は乃ち数歩の藍田に繁殖するに至りたり。

琉球即ち沖縄島に於て山藍を栽培するの地方は重もに山原と称す凡田舎にして此田舎の中にも其最も盛なるは第一名護間切次て本部間切なり。本部間切と名護間切とは互に相隣接して那覇を距ること東二十里内外の処に在りて丘陵起伏山林多くして平田稀なり。其地質は一般に亦粘土に石灰分及び曹達分を含んで自然結塊し易きを以て耕耘の労も亦從て難しとす。其山藍を栽植するの場所は本部は多分山谷林間の新開地にして名護は普通穀類甘藷を産す可き田圃なり。此田圃に培養する者は牛馬野羊の厩肥を以て其肥料と為すと雖とも新開地は別に肥料を施さず。故に名護産と本部産とは品位に於て優劣あり代価に於て高下あり。蓋し名護本部の二ヶ所は琉球に於て山藍の本場と称す可し。

当今其販路は那覇首里並に其近傍諸村先島道之島及び内地にして之に至るは凡て那覇藍商の手を経ざるは無し。

山藍の代価は近年内地交通の益々熾なるに従ひ販路需用の次第に多きを以て漸次愈々騰貴に趣き明治十四五年の頃は那覇市場に於ての相庭大抵本場の上を以て一片二三錢なりしも十七八年に及んては則ち四五錢に至り二十年には六七錢となり本年の如きは十五六錢の高点に達せり。但し十五六錢の高点に至りたる所以は十九年秋非常の風害に罹りてより爾来藍田の不作を來たし大に製藍の欠乏したるに由る者なればこは唯た一時の相庭にして固より普通の代価には非ず。

然れとも近年の相庭^{ママ}は普通四五錢の処に在れば藍作は他の農作に比して莫大の收穫を見るを以て近頃藍作に従事する者益々多く沖縄土族の産無く業無く旦夕糊口に迫り首里那覇を去り山原に行て卒に農に歸する者は概ね藍作を為さるは無し。

山藍の收穫は亦他の作毛と同じく地味の沃瘠肥料の有無栽培の善惡等種々の原因より必ず多少の差なきこと能はずと雖とも今茲には概略の計算に従ひ平均を以て一畝歩一年間の收穫を示さんとす。

其無肥料なる山谷林間の新開地は凡て生葉四百五十斤にして製藍百二十斤を得可く又其有肥料にして善良なる田圃は凡て生葉九百斤にして製藍三百斤を得

可し。然れば則ち良田一畝歩一年間の収益是一片四錢の代価として算る立も金十二円となる可く其内肥料耕作及び其他の費用六円と見て差引六円の純益ある可し。但し初年は苗代を要するを以て其六円を費消す可きも二年目よりは苗代を払ふに及はされは其総費用は如何に充分の耕作充分の肥料を為すも二円と視れば乃ち足らん。然れば則ち二年目より十円の純益を見る可きなり。又新開地一畝歩一年間の収益は一斤三錢の代価として金三円六十錢と為る可く其内耕耘諸費一円六十錢とするも猶ほ二円を残す可し。

説て茲に至れば人或は疑惑を生し余に謂て曰はんとす。子は誠に虚説家たり又甚しき空論者なり。饒令山藍は如何に過分に収益の有る者と想像するも豈に能く子の言ふ所の如くならんや。若し子の説をして果して真ならしむれば山原の藍作者は近年各々非常の富家とならざるを得ず。然るに其富家と成るの事實は余未た之を聞かすと唯た余の説を聴く者は宜しく当に然るべきの疑なり。然りと雖とも実際の模様就て之れか観察を下すときは亦必ず余の説の妄作に出をさることを知了す可し。

夫れ山原の藍作者は一般貧困の農家にして寒天に単衣を着し三百六十日甘藷蘇鉄^{ママ}を食ひ茆茨屋^{ママ}を構へて漸く雨露を蔽ひ居るに席無く行くに鞋無く人糞以て糞を養ひ牛馬野羊と伍を相ひ為す。其山藍を作るに多からんと欲する者は田圃少く田圃ある者は肥料乏しく肥料無く又田圃無き者に至ては山谷林間を開拓して之に藍作を為すと雖とも旦た継命にすら困却するの貧者なれば固より少々たるに過ぎす。且つ前以て其收穫を目的とし那覇の藍商より金穀他物を借用するを以て製藍を得るの時に及んては勢ひ那覇の市価より普通半価に売らざるを得ず。是故に藍作者の状態は單に那覇市上^{ママ}の相場を以て推す可からず。那覇市上^{ママ}の相場は以て藍作者所得の利益を代表す可き者に非ず。然りと雖とも藍作者をして此中間の事情に關せざらしむるは其利益の非常なる豈に畜た五牴を畜ふの比のみならんや。論者尚ほ若し余の説を疑はゞ請ふ實地に就て之を験せよ。必ず余の言の妄ならざるを知る可きなり。

山藍は以上論述する如く農産中最も収益の多くして用途の直接且つ遠大なる者なれば之を内地に移植して今日畑藍を作るか如く一般農家の栽培する所と為

をは唯た一種の農産を増加するのみならず。之を小にしては則ち一国の益となる可し。此故に凡そ日本の農政家は之を我農民に告げ以て栽培繁殖を謀らざる可からず。凡そ日本の農業家は之を其田園に植へ以て盛に栽培製造せざる可からず。然るに此事に至ては農事改進の今日を以て尚ほ之を實踐する者あるを見ざるのみならず其説あるか如きも亦未た之を聞かす。

余の始めて斯説を為すや聴く者殆んど賛成せざるは無しと雖とも亦稀には非難する者無きに非ず。而して其非難者の言ふ所は大抵左に述ふるが如し。

人あり曰く。琉球藍を内地に移植して其功を臻することは子の経験試植に依て之を証するは更に疑ひ無しと雖とも内地に於ては古より阿洲藍ありて一般久しく習用し其産出は充分需用に応するに足て全て欠乏を告げされは今琉球藍の移植は以て必要と為し難し。且つ琉球藍は阿洲藍より其代価も高しと云ふ。今安価なる阿洲藍を非として以て高価なる琉球藍を用いしめんとす需用者に於ては果して何の利ある可き余は其説の可なるを知らずと。

此非難は在来の事物に安着して新規の事物を悦はず品質の善悪製造用方の便否等此種々の得失利害は之を考察の外に放逐して事物の用捨を判決するの要素と為さず。代価の卑きは以て需用者の利得と為して代価の高きは其功の多きを悟らざるに出る者なり。此非難の如きは割に説きたる阿洲藍と琉球藍との優劣勝敗を以て之に對するも容易に消滅せしむ可しと雖とも尚ほ非難者の安心せんか為め更に山藍の新利益を弁明せん。

今日山藍は琉球及び内地に於て普通なる用途に供するの外製造を一変して藍靛【インジゴ】と為すに於ては亦藍作は更に一大利益を生ず可し。藍靛は畑藍よりも之を製するを得可しと雖とも其品質の遠く山藍に及ふ能はざるを以て藍靛^{ママ}を製するは山藍より善なるは無し。若し非難者の説の如く内地の需用は阿洲藍を以て足れりとすれば之を藍靛に製して一は外国輸入を防ぎ次で輸出を為すに至れば亦我国の幸福にならずや。

又曰く。子の説に従へば内地移植は太甚た善なるに似たりと雖とも一般之を押し広めんと云ふに至ては到底出来可き事に非ず。抑も植物の性たる地

質の異同氣候の寒暖に由て必ず其適不適あり。且つ山藍の如きは素と熱帶地方の植物なれば鹿児島地方和歌山地方の或部分には適す可きも一般内地に移植して好結果を視る可しとは殆んど信用する能わす。抑も亦内地一般に之を押し広めんには何の方法有て乃ち能く之を成さんやと。

論者は内地移植に就て温暖なる地方を擇み其幾分は之を可とするも一般は地質氣候の適せざるを恐て之を否とし且つ内地一般之を押広むるは到底能す可きことに非すと思ふか如し。地質の異同氣候の寒暖は移植の植物を以て自然の威力に放任すれば其死生榮枯は偏に之に因らすんは非すと雖とも苟も其然らせる以上は則ち其生成の道に於て常に驚く可き効果を生する者に非す。何となれば人為の培養は恒に天然の効力に勝ること百倍なるを以てなり。試に看よ煙草茶棉蕃椒人參紅花甘蔗甘藷及び馬鈴薯の如き此數種の植物は皆な我国固有に非すして素と印度支那及び其他の邦より移植せし者に非ざるは無し。其移植の当初に於ては唯た僅に彼處此處に散在して甚た稀なりしことなる可しと雖とも今日に至ては我国到處其栽培盛にして而も農産の大部を占めたり。其茲に至りたる所以のものは果して地質氣候の之に適せし故となさんか。移植以來我國の農夫か春は栽へ夏は耨り秋は収めて冬は貯へ終歲少しとも油断せず。千万の注意を費し寒熱の辛苦を経たる所謂人為培養の效果に依らすんば非す。又其能く今日の如く一般各地に伝播したる所以のものは其之より生する利益の致す所なり。蓋し利益の奨励は實地の事業に於て活発の精神を賦興し其威力の及ぶ所天下の耳目を驚動する者往々之れ有り。論者若し能く之を悟らは以て疑ひ無かる可し。

非難も尽きたり答弁も終えたり。依て左に栽培製造出方の三方法を開示せんとす。

今栽培法を示陳するに當り先づ植物生成の理に基き宜しく農家の注意す可き一二の事柄を明言す可し。凡そ農夫は植物生成の道に於ては之れか父母たらさる可からず栽植は則ち之に住居を与ふるなり。耕耨は則ち酒掃其座を潔ふするなり。肥料は則ち之に飲食を供するなり。故に農夫は是等の諸事を処弁して以て父母たるの職分を蓋す可し。又農夫は同前の道に於て之れか醫師たらさる可からず根腐敗に罹るは則ち其口の病なり。皮虫害に逢ふは則ち其膚の疾な

り。葉霜雪に破られ枝幹風雨に折らるゝか如きは則ち支体の傷創なり。故に農夫は若し是等の病疾創傷あらは善く之を治療して以て醫師たるの職業を尽す可し。

山藍は其植物性に於て温暖を欲して乾燥を厭ひ濡潤を好んで寒冷を惡む。故に冬に寒冷を防て温暖を得せしむ可く夏は炎熱を防て濡潤を受けしむへし。山谷林間は其之を為すに於て冬夏兩なから宜しきを得るに易し。

栽培法

- 一 藍苗は琉球国名護間切本部間切のものを良しとす。
- 一 地質は砂地寒灰地を除くの外適當せざる所無し。水田の如きは最も能く之に適す。
- 一 植付の期節は春季華氏六十度及致六十五度の時とす。
- 一 植付を為すには数日前能く地を耕し置き当日に至て通常の畦を作り之に能く熟したる人糞を施し薄く土を覆ひ苗は各々三枝を以て一株と為し株と株との間は八寸より一尺を度として斜に畦頭に挿む可し。
- 一 植付の日は成る可く雨天後を計る可し。若し植付后久しく晴天の引続くときは毎日一二回つゝ水を灌ぎ且つ藁芥を以て日蔽を為す可し。
- 一 新芽の稍や榮育したるときは一番刈【けずり】を為して熟したる人糞を与へ自是以後は総て畑藍に於けるか如く時々𦵏干鰯等の肥料を加へて培養し其繁茂成熟を待て一番二番と刈り採る可し。
- 一 成熟刈採の期節は第一番を大暑前後とし第二番を秋分の頃とす。
- 一 其成熟を鑒識せんには左の形狀に依る可し。
中葉の大きさ凡そ四五寸に及び下葉は稍や黄みて新芽の發育は下葉の凋落と損益相均しき形狀。
- 一 既に成熟したるときは畑藍を刈るか如く之を刈り採り直様製造に着手す可し。
- 一 山谷林間に植付を為さんとすれば豊穰なる地味を擇み合抱の大樹は唯た其儘に捨て置き柴艸を薙き去て之を開耕し別に畦畫を要せず一面平植として肥料を用ひさるも亦可なりとす。
- 一 挿し木を為す場合に於ては成熟前枝を刈り三枝を組み合はせし甘藷蔓を栽るか如く斜に之を挿

むて后日蔽を為し置く可し。

- 一 苗の貯蔵は秋寒の頃強壯なる新株を撰み甘蔗甘藷を貯蔵するか如く温穴又は温室に入れ能く水雨寒冷を防ぎて春暖を待を可し。

貯蔵法はほかの植物の例に於て土地の習慣農業の経験ある者なれば今茲に之を略して詳説せず宜しく我彼参酌して適宜の法に従ふ可し。

参考

琉球に於て新に藍田を作らんとするには穀雨前后に地拵を為し凡そ二十日間を経たるとき再び能く之を耕し雨后を待ちて藍田より枝藍を刈り採り来り苗と苗との間一尺位つゝ相距てゝ平一面に之を挿み蟲及び野羊の厩肥を投げ散して肥料と為す。然る后藁芥及び其他艸木の枝葉を以て苗を蔽ひ自是以后は同前の肥料を加へ植付より三ヶ月を経て一番刈を為す。方言之を春藍と云ふ。又此時より三ヶ月を経て二番刈を為す。則ち之を秋藍と云ふ。尋常田圃に栽培する者は毎年其場所を換ると雖とも山谷林間は一度の植付を以て三年及至五年に及び其間歳々春秋兩期の収穫を為す。

栽培法は以上之を説き尽せり。依て次て製造法に及ふ可し。

今製造法を示陳するに当り先つ茲に一言し置く可き事あり。原来此製法は最も簡短手輕にして何の造作も無き者なれば其未だ経験せざる人に於ては頗る奇怪に思ひ疑惑を生して殆んど信用する能はず。然れとも素と是れ山藍の性質に於て然らしむるものなるか故に敢て疑惑を為すに及はず。

製造法

- 一 製造場は水の便利を占めて唯た雨露を防ぐに堪へたる処を設け之に大桶又は大甕を設置す可し。
- 一 藍田より刈り来りたる生葉は直に之を大桶又は大甕に投し其上に石を押へ然る后生葉の没する迄之に清水を盛り二三日間徒た放置可し。
- 一 斯の如くして既に二三日間を経過すれば水色忽ち青く変して水面無数の紅金点を発ち恰も花片の浮ふか如し。是れ則ち藍分は其葉を出てゝ水分に混合したる徴候なりとす。
- 一 此時に至れば押石を除き竹又は木の棒を用て勢ひ能く充分之を攪乱て直に枝葉を採り揚げ人手又は器械に掛けて能く其水を絞り取る可し。然るときは水色愈々濃厚にして水面深紅の花泡を

表す。其枝葉は尚ほ青色を帯ひて甚しき変化あるを見ずと雖とも最早糟糠に属するを以て捨てゝ肥料と為す者とす。

- 一 其藍水は一石に対し上等石灰二升及至三升の割合を以て之に投し能く棒にて攪乱し凡そ六七時間を経れば藍分は水分と相離れて器底に沈殿す可し。然るときは静に其上水を流し去て沈殿したる泥藍を採り揚げ更に大風呂敷状の綿布の上に之を置き尚ほ能く水分を去らしめたる上桶又は甕に容れて貯蔵する者とす。則ち之を製造したる山藍と為す。

製造に関して注意す可き重要な事柄は左の如し。

- 一 生葉は成る可く能く成熟したる者を用いんことを要す。若し不熟の者を用ゆるときは色薄く量少くして大なる損毛を来すのみならず動もすれば皆無出来さることある可し。
- 一 浸水時間は二三日間と為すと雖とも極めて上品を得んとすれば一日半を過す可からず。又下品を得んとすれば三四日に及はんことを要す。但し上品を製するときはその量少く下品を造るときは其量多し。
- 一 石灰を用ゆるに其量多きに過くるときは出方に於て障害を来たし又余り少きときは貯蔵に於て腐敗を生ず故に務めて其中を得ざる可からず。製造法も亦已に之を終へたり。依て出方法を解説す可し。

出方法

- 一 出方は水と木石灰及び焼酎の四品に由て成る者とす。其割合は左の如し。
- 一 泥藍一百斤
- 一 清水一石
- 一 木灰 山灰なれば四升竈灰なれば一斗五升
- 一 石灰（泥藍に於て石灰分充分なるときは之を用ゆるに及はず。唯た其少きときに限り一二合を用ゆる者とす）
- 一 焼酎四合
- 一 桶又は甕に先つ泥藍を投し木灰の山灰なる場合に於ては次て亦之を投し水を盛り竹棒にて能攪乱すること毎日一二回にして二日目に及んで焼酎を入れる可し。然るときは早き者は三日遅き者は五六日を経て全く能く出るものなり。其全く出てたると尚ほ未だ出てきるとを識別するには

左の形状を以てす可し。

全く出てたる者は其表面に深紅色の花泡を生して一般紫雲色を呈し若し竹棒にて其上部を掻き回すときは紫雲は散乱して卵黄色の地を見る可し。

又尚ほ未だ出てさる者は花泡少く紫雲と黄地との区別曖昧にして其色轉た鬱然たり。

一 竈灰を用ゆるときは水に漬して灰水となし沈殿せしめて其粕を捨つ可し。

一 若し出難き場合及び一度出てたれとも染物を為したるに依り曇りたる場合に於ては焼酎若しくは小麦粉の糊を投す可し。然るときは一兩日にして能く晴る者とする。

山藍新書全終

東京々番區采女町文英社印行

2 内容の解説

本書の構成は、琉球藍之説、内地移植之説、栽培法、製造法、出方法の項目が立てられているので、各々の内容についてここでは概略を記す。

(1) 琉球藍之説

藍には阿州藍と琉球藍の2種がある。阿州藍は一名「畑藍」といい、内地のどこでも盛んに栽培されている。琉球藍は「唐藍(トウイエー)」「藍(イエー)」「山藍(ヤマイエー)」と称し、琉球地方に限って内地には伝播していない。山藍は染料の成分である藍青藍紅が多く藍褐に乏しい。阿州藍は琉球藍より藍褐に富んでいる。山藍と畑藍の品位優劣を比較すると、琉球藍は2倍以上の成分を含む。阿州藍は栽培法も製造法も製藍家でなければ難しいが、琉球藍は婦女子でも栽培でき、製造も短期間で容易である。したがって、山藍と畑藍とでは、前者が品位すこぶる優等で、製造も容易であり、用法も便利であると述べている。

(2) 内地移植之説

琉球藍の有益性を説明した上で、これを内地に移植できないかと試みたことが説明されている。琉球と内地とは風土気候が違うので、藍栽培で一度はす

ぐに枯らしてしまったが、さらに注意深く育苗したところ生長したことを述べ、知人に配って琉球藍を育ててもらったことなどを書いている。また、冬は越冬するために必要な方法を種々実験した結果をのべ、育苗の方法を詳しく紹介している。一方、山藍を内地に移植した場合に反対する意見に対し、詳しく批難者の言葉を述べそれに対応した意見を述べている。

(3) 栽培法

前半は本土での栽培を想定した方法が記されている。内容は以下のとおりである。

藍苗は名護間切か本部間切のものが良い。地質は砂地寒灰地を除き、水田のような所が最も適する。植付時期は春季15℃～18℃の時、その前に地をよく耕しておき、植付当日に畦を作り熟した人糞を施して薄く土で覆い、苗3枝を一株とし、25～30cm間隔で斜めに畦の上部に挿し込んで植え付ける。植付日はなるべく雨天の後とし、もし植付後に晴天が続くときは毎日水をまき藁芥で日覆をする。新芽が出てきたら人糞を与え、その後も時々粕干鰯等の肥料を加えて繁茂成熟するのを待つ。

刈取時期は大暑前後で一番刈、秋分の頃に二番刈とする。成熟の識別は、中葉の大きさが12～15cmで下葉がやや黄みを帯びた形状。すでに成熟していたら刈り取って直に製造に着手する。

後半は参考として沖縄での栽培方法について述べている。まず、沖縄では新たに藍田を作る時には、穀雨前後に地拵えをし、20日後によくこれを耕し雨を待つて藍苗を30cm位の間隔で挿し木し、野羊⁴⁾の厩肥を投げ散らして肥料とする。その後、藁芥や草木の枝葉で苗を覆い、それから以降も同じ肥料を加えて、3ヵ月を経て一番刈をする。これを方言で「春藍」という。またそれより3ヵ月を経て二番刈をする。これを「秋藍」という。通常、田圃は毎年場所を替えるけれども、山間部では一度の植付で3年から5年の間春秋の収穫を行う。

そのほか、山谷林間を開耕して植付ける場合の法や、苗の貯蔵法などが記されている。

⁴⁾ 野羊は「山羊」のことと推察する。

(4) 製造法

製造場は水の便がよく雨露を防げる場所に、大桶又は大甕を設置する。刈り取ったアイの生葉は直に大桶又は大甕に投入し、その上に石をのせて押さえ、清水を入れて2、3日放置する。2、3日経つと水の色は青く変化し、水面に無数の紅金色の点々が発生する。これは藍分が葉っぱから出て水に溶けた兆候である。このとき押石を除き竹又は木の棒で勢よく攪乱し、すぐに枝葉を取りあげ人又は器械で藍の水を絞り取る。このとき水の色は濃厚にして水面には深紅の花泡が表れる。その枝葉は青色を帯びてそれほど変化がなくても早々に取り捨て、残渣は肥料とする。

藍水に一石に対し上等石灰2升ないし3升の割合で入れ、棒でよく攪拌する。凡そ6、7時間経つと藍分は水分と離れて器底に沈殿する。そうしたら静かに上水を流し出し、沈殿した泥藍を取りあげ、さらに大風呂敷状の綿布の上に置いて水分を切り、上桶又は甕に容れて貯蔵する。これを「山藍」という。

生葉はよく成熟したものをを用いること。未熟なものは色が薄く量も少なく下手したらできないこともある。

浸水時間は極めて上級品な藍を作ろうとすれば1日半とし、また下級品を製すときは3、4日置くこともある。ただし、上級品は量が少なく下級品は量が多くなる。

石灰は量が多すぎると藍建てに支障が出る。逆に少ない時は貯蔵している間に腐敗するので中庸が良い。

(5) 出方法

ここでの出方とは、藍建ての方法である。

藍建てでは、水と木灰、石灰、焼酎の4品を使う。その割合は、泥藍100斤に対し、水1石、木灰（山灰であれば4升、竈灰であれば1斗5升）、石灰（泥藍が石灰分を十分含むときはこれは必要ないが、少ない時に限って1、2合用いる）、焼酎4合である。

桶又は甕に泥藍を投じ、木灰（山灰の場合）と水を入れて竹棒でよく攪拌する。これを毎日1、2回行い2日目には焼酎を入れる。そうすると早いもの

は3日、遅いものは5、6日で藍が出る（建つ）。その形状は、完全に藍が建っているものは表面に深紅色の花泡を生じて紫雲色を呈し、その表面を掻き回すと卵黄色の地が見える。まだ藍が出ていないものは花泡が少なく、紫雲と黄地との区別が曖昧である。

なお、竈灰を用いるときは、水に浸けた上澄みの木灰水を用いる。もし藍が建たない場合や染めた後で曇った場合は、焼酎もしくは小麦粉の糊を投入すれば、一兩日には調子が良くなっている。

考察

今回取り上げた『山藍新書 全』は明治21年の記録である。したがって、そこに記された琉球藍の栽培や製造方法あるいは藍建ての方法は、明治21年以前からすでに沖縄で行われていたものと解することができる。本書に記された内容と現代の製藍工程を照らし合わせてみると、現代の製法は当時とほとんど変わっていないことがわかる。まずアイ葉の栽培方法では、地拵えをし肥料を入れることや挿し木による植え付け、日覆、刈り取り時期など、どれも今でも同じ工程を踏んでいる。詳しく見ると、肥料が人糞や山羊糞などの厩肥から牛糞や鶏糞、化学肥料等になり、日覆の道具が藁芥や草木の枝葉から寒冷紗の使用へと変わっている。しかしながら、基本となる製法は、明治20年代の方法が現代にいたるまで継承されてきているといえよう。

つぎに、製藍技法についても、アイ葉を浸漬して液を抽出し、そこに石灰を加えて攪拌し、静置して沈殿した藍分を泥状になるまで水分を取り去るという工程は全く同じである。ただし、アイ葉を漬ける装置が大桶か大甕であるという点で、円形すり鉢状の露天の藍壺を使っていた近現代の沖縄の製藍業と異なる実態が見える。この点において本書は、円形すり鉢状の藍壺がいつから沖縄で作られ始めたのかという疑問点を筆者に提示した。すなわち、明治20年頃の沖縄の製藍業では、藍壺はまだ使っていなかったと考えられるからである。藍壺のことを詳細に報告している大正4年の記録⁵⁾から、大正初期にはすでに藍壺等を頼んで作らせそれを用いて製藍し

⁵⁾ 児玉沖縄県技師「沖縄県染色植物」1915（大正4）『沖縄県農林水産行政史』第15巻に藍壺・玉壺の記録がある。

たことも明白である。しかし、この大掛かりな製造装置や製藍技法が導入された時期やきっかけについては依然不明であり、今後も引き続き調べていきたい。

つぎに『山藍新書 全』では、品質の面で上級品と下級品の藍について言及があり、浸漬時間と製造量との関係で製造者が品質をどう操作するか、技術的な策略があることも記載されていた。さらに、石灰量の多少による藍建てと貯蔵との関係についても触れており、浸漬時間とともに石灰の分量も藍の品質を決める上で重要なファクターであることを示唆している。

最後に、藍建ての方法であるが、木灰と石灰を両方使うこと、山灰と竈灰では使用方法が違うこと、藍を溶出させるために焼酎や小麦粉糊を入れること等が記されている。とくに山灰と竈灰の違いでは、山灰というものは予め灰汁をとらずに直接藍甕に投入すると記されている。これは山灰の性質によるものと思われるので、科学的な知見を含め今後の研究課題としたい。

おわりに

『山藍新書 全』は、「沖縄の藍」展において史料として購入し展示したものの、同展では十分に内容を紹介することができなかった。今回、本稿において本文の書き起こしを行い、できる限り分かりやすくするため旧漢字や変体仮名を直し句点を挿入して紹介することができた。明治時代初期は、海外からさまざまな物が入ってきた時代で、日本の藍染料業界にも大きな波が押し寄せた時代である。印度藍の移入や化学染料の流入により、天然の藍染料は大きく影響を受けていくわけだが、その中でも沖縄で明治30年代まで琉球藍の製藍業が飛躍的に発展した理由は何であったのか、まだ明かなことは言えない。そうした点からみても『山藍新書 全』は大変貴重な史料であり、同じ頃に著されたほかの史料とも照らし合わせて、今後の研究に活かしていきたいと思う。

本稿を著すうえで、本文の書き起こしにおいて崎原恭子氏に協力していただき完成することができた。ここに感謝の意を表したい。

引用・参考文献

- ・石井清吉 明治21年（1888）『山藍新書 全』文英社印行
- ・石井清吉・岸精一 明治23年（1890）『山藍新書』大木敬太郎発行（NDLデジタルコレクション）